農業専門紙の生分解性マルチユーザー事例紹介記事

日　本　農　民　新　聞

（3）　　2017年2月25日

生分解性マルチの普及推進へ

落花生生産現場での活用事例

千葉県香取市 名古屋農園で

生分解性マルチは、露地野菜栽培を中心に様々な品目で活用が進んでいる。その中には落花生栽培もあるが、まだ、普及はこれからの段階にある。落花生栽培での生分解性マルチ活用に10年以上取り組む、千葉県香取市の名古屋農園（名古屋喜美夫さん、70歳）の、活用状況を取材した。

生分解性マルチで被覆した圃場

掘り取り時の圃場

作業労力軽減の強い味方
スムーズな生育で高品質化のステップに

名古屋農園での落花生づくりは、喜美夫さんの父の代、50～60年前に遡る。当時は麦作の間に作っていたが、現在は落花生1・2haと、甘藷2ha中心の経営となっている。

落花生も甘藷も年1作の夏作。ともに5月に播種・植付けを始め、甘藷は盆までに2回出荷出来るよう8月初旬から収穫、落花生の収穫時期となる9月下旬～10月初旬と作業がかち合わないよう、10月初めには出荷を止める。「両方同時の収穫作業は休みなしできつい」。「かといって少量でも毎日定量を出荷しないと市場の信用はなくなる」。こうした悪循環を避けるためでもある。

◇　◇　◇

落花生の品種は、ゆで豆用の「おおまさり」「郷の香」と、殻付用や加工用向けの「千葉半立」の3種。ゆで豆用は5月始めに、以後2週間程度ずつずらして播種をする。名古屋さんは「天候にもよるが5月8、18、28日を大体の目安に」している。

「その頃は、地温が上がらないのでマルチによる被覆は絶対必要。マルチを張るのは播種の前日か2日前。マルチを張ってから雨が降ると、穴の開いた部分の土が硬くなって発芽が悪くなるので、雨が降らないうちに種を播く」ことを心がける。

マルチ栽培は、雑草発生も抑えられ、地温が高くなり土が軟らかく保たれ、莢の数も多く豆に太くれる人がだんだんいなくなった。

◇　◇　◇

名古屋農園での生分解性マルチ導入は13年前。試験栽培で一度使ってすぐに翌年から全面的に切替えた。「とにかく作業が省力できることが大きな魅力だった。」「生育や品質にもいい影響がある」とも感じた。

「ポリマルチでは、剥がす7月上旬頃までに梅雨が明けていればよいが、下旬までずれ込むと、地温を下げて生育に悪い影響を与える。生分解性マルチならばそのまま張っておいて、徐々に分解が進むため地温の変化も少なく、スムーズな生育が期待できる」。

落花生は花が咲いたのときの何倍もの嵩になる。その処分にもひと苦労した。暑い最中の中腰になっての重労働ゆえ、ちにマルチを剥がす。

「マルチ穴を上に抜くが、育ちの悪いのはふらつき畝立てにも悪い。悪天候で剥がす時期がずれたりすると、株が大きくなって穴から抜けなくなり、マルチが切れてさらに手間がかかる」。ポリマルチを使用していた頃は、名古屋さん夫婦と両親で面積1・5haを栽培し、マルチ剥ぎ作業にはパート3人が加わり7人で朝から夕方までかかりきりでも1～2日を要した。剥がしたマルチは使用前の巻きぐせがつき、スムーズな展張ができない。

掘り取り時期の9月下旬から10月中旬までには、生分解性マルチはほとんど分解して「パラパラになる」。

千葉の栽培農家では、収穫した落花生を「ノウ」（ボッチ）と呼ばれる野積みをして1か月程度乾燥させる。これで落花生の甘味が増す。

掘り取り時までに分解されずに残ったマルチが、そのまま挟まり〝ノウ〟を崩し脱穀。水洗い、殻剥き、加工、焙煎等の工程を経て商品が作られる。

◇　◇　◇

名古屋農産の落花生は、バターピーナツは八街の問屋、甘納豆は千葉のお菓子屋に原料として供給されているが、ゆで豆、焙煎、殻付きなどは、自身で加工し商品化する。農作業と加工作業が周年続く。こうした中、70歳を迎え今、「労力軽減は何物にも代え難い」。

ポリマルチを使っている甘藷の栽培にも、「生分解性マルチの活用をテストしてみようかと思っている」。